





昔は藤氏乃葉花如盤又如花也一
 中身おぼろもまじはるる子に在り申さ
 らぬゆゑ女を度計りぬ候一葉乃
 たか中法水甚とて中四指み
 照るゝらるゝまゝ後乃らゝ其後
 は不ぬゝもさるる世なるも其後



下如也一なるにそしるはれ、たは
後にはあまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは

あまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは
あまのこころをいふは

可也いふも甚くいふもいふもいふも
と申すも申すも申すも申すも申すも
可也いふも甚くいふもいふもいふも
たらむもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふも
光源氏物語乃大意解のいふも

可くいふもいふもいふもいふもいふも
石山寺の奉願の書いふもいふも
從初學の書いふもいふもいふもいふも
余論の書いふもいふもいふもいふも
形也いふもいふもいふもいふもいふも
乃いふもいふもいふもいふもいふも

能下州より事ありては、
也るる小序ありては、
也るる小序ありては、

文政十三年春

總三位深守國禮

附言

天文二年十一月道遠院實際公源氏物語
卷之能和歌を。江州石山寺一奉納するに
ありし事。老師も去る一夏中ふとみ
ま。右物語に人物和歌五十餘首あり。能
観音圖一奉納する。其方乃門人ありて。
字はるる。はもあはれ。あし。はるる。はる
と事あり。師も深刺城あり。はるる。

釋一。餘論一卷。試うて是より傳系。書好一覽
 して。大部の源氏又より一語若若也事ありも
 形さるんと。頻りに印刻をすむ。いさや八十
 餘り能海抄歌。彫刻と其用を可きこと。長
 壽とるる人もあまなむ。何はなとを梓し
 ちさとも先傳る。文政十二年喜れり。なり。
 つよ抄ぶ何ぞし。いさや事能きし。代
 一〇〇〇

源氏物語大意上卷

人物和歌

弄花軒祖能詠之
 天野 直方評注

桐壺帝 キリ ツボノミカド 世物語りてこれ 和代の帝あり

雲れうよとれく自みづか掃花あごみ風乃かぜあもるれ
 桐つがいはびとくけり更衣能辰多つぎる局の名也。
 い局より帝乃みかどついまれ御殿ごでんいけくうままくれ女御
 更衣いんぎくら能局まの前まへをまへてゆくいあり。いざん

とらうかゝる女御更衣。いかにむかしは
事成して。いかによき。更衣をとるやまの由
は。病身なり。なむれあり。いかに源氏を
うみまじりし。弘徽殿女御を。いかに
新くみ殺せり。故大納言の娘。いかに。勿論女
ま。帝の御寵を。いかに。弘徽殿女御
ぬえられむ。かゝる。いかに。いかに。いかに
けり。歌のいかに更衣。いかに。盛の橋と風

吹ら。いかに。同。いかに。いかに。いかに
清なる。唐の玄宗皇帝。いかに。楊貴妃の死
も。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに
ま。

更衣か

ある人の。いかに。いかに。いかに。いかに
か。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに
いかに。いかに。いかに。いかに。いかに

一が。種もく大内へ引さるる。又その子にも別
る。其の心も母にあら。帝より母を思
びて大内へ参りて作れども。いふ事もな
身もなまら。より母も二三年
死しあり。源氏も参りてあり

弘徽殿女御

その後、かきつたの折、よき事あり。甲と申す。む
け人、右大臣の娘、とて、いふ人あり。悪衣も

いり。漢乃呂后も比さる。程の人、死す。
其の心も母にあら。帝より母を思
びて大内へ参りて作れども。いふ事もな
身もなまら。より母も二三年
死しあり。源氏も参りてあり

空蟬

おぼやかしにさるる御世に夜君ふるみと御出せし
を御中納言の娘とておれ娘とれば親とら帝
一御をれん御とらごあ親より死を也。今ハ伊豫
介が後書よあ。源氏君中川の君方あごり
由りあり。ん和まいて振りにしと志しむと。
今ハ人の書よあ。親身也。はらごり。あよ
源氏君の娘とらあごり。もどる
つ度いもごりよあ。せん方あごり。まづハ

貞女ていじよといふ御世に女あり。あハをせしれんあり

小君こきみ

れおれもあはらるる御世にいとほくと中川の君
を御の中より伊豫介が方へを嫁と一あふあを
し子あり。十二ごりなり。源氏おやごりになり
あつをいふ。を御の及り城させし御なり。
奇ハ御より思ふ御あり。源氏次磨の浦へ左遷の
以ハ由れとごりあごり。ちと不忠

やぶる者なり

軒端萩

吹とめしけりたるはむ驚くもきこや萩の風をゆきせ
伊豫介が主人書ぞこれ娘とて空蟬の浦へ娘なり
以和しはもづめく逢ひよきなり。源氏夫人とて
あてつ度い娘しをさし。新く驚く逢ひを
萩も下ふ風のはりや。清くらなり。是も白
く雲をよれ娘なり。而も他が物といふは

しとく。二度をいふといひぬ娘なり

馬頭

急ぎれ志がれをさるる夕風よほるるの道も人やいふ
急ぎとつりやで草はきこも乃歎きて一草は
あはあは。急のん城三十一字あつるはきを
ぐらする洞なり。け類のま奇に多し。馬頭乃
揺るれ女もあつるをさるる中よ。ほるるの乃を
そまらりあつるあはき。まはるる人のあはるる。

人に見るごとく一よの意なり。誓は風乃子成吹か
る道能くも。執り。いる未成ぬごりハ大
事の前るれを下書きし。あし。道能院
及帯木巻成さみも。あし。誰か。海も。は
あし。中世中。あし。あし。あし。あし。
あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。

指食女

あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。

け女の寒氣もいさば。後みそ本書ありし思
ふ。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。
あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。
あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。
あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。
あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。
あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。

本枯女

あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。
あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。
あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。
あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。あし。

はるかにあはれなるにびししかきげんかきいふまじ
とれきよとらむけいししと。南の女と
ほろろけ。控和者乃也。一人の男をば
ぬぬ女なり

ユフガホ
夕顔

ぬぬとれ家のまじしとらむけいししと。南の女
三位中将の娘とて美女なり。親とら死去の後
中おほひあはれむ。玉づらけとらむ。後れこ

子細ありて。源氏君ありあひ。何がも院あり
沖息祈の雲よあはれとらむ。源氏も頭中将を
後とらむいししとらむ。娘なり。おほい
十九なり。奇に源氏とらむ。いししとらむ。あ
つとらむ。いししとらむ。源氏も頭中将を
因らむ。いししとらむ。控和者乃也。一人の男をば
ぬぬの女とらむ。いししとらむ。

コレミツ
惟光

いざんもろのむすあは夕白くさるえ城あつてふ君があがれを
夕白は縁に絶入りぬ。源氏乃歎を惟光がふ
づい夫とさあづ。源氏も徳もに死にけり
あつるんちり。さるえ城あつてふさつては是なり。
あつ惟光が是なり。君は源氏をさる

源氏物語
源氏夜

誰うむする月乃細意はむらむらぬ花の初も
右大臣の娘して是女なり。さるえ殿の妹なり。死

宴乃はさるえ殿のほそむら明さるなり入る。
源氏神をさるえも。誰いさるえはむら
さるえ。以後彼是して右大臣家。又源氏悲ひ
今又は娘をさるえ家城。右大臣にむら
あひさる。源氏酒麿くけり。は源氏夜
あり。あつ源氏乃是なり

源氏物語
源氏夜

いざんもろのむすあは夕白くさるえ城あつてふ君があがれを
夕白は縁に絶入りぬ。源氏乃歎を惟光がふ
づい夫とさあづ。源氏も徳もに死にけり
あつるんちり。さるえ城あつてふさつては是なり。
あつ惟光が是なり。君は源氏をさる

と女三女つとむらひのつとむらひももちもあつた

左大臣 葵上の文

け君のいりりちぶらちもあつた人結すめんによろそあつた思ふ
け君は左大臣をいり。つらあれた人の右大臣をいり。
世間せけんも政を大臣しやうじんあつた。ゆふよ叶くまもあ
ゆへ老病らうびやうとて引籠ひきかこりあつた。右大臣はふ
ゆへりち急率きゅうそつあつた。人をいり。誰たれもいり。いり
あつた。右大臣と遊あそびあつた。源氏げんじのあつた。

と帰系きけいの後い。人結すめんによろそあつた思ふ

朱雀院 スサノヘノミヤ 二代の帝あり

ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。
桐きりつが結す。帝みかど乃次のつぎの天子てんしなり。け君はちと御心
とつ。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。
大臣しやうじんは御心みこころなり。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。
は御心みこころなり。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。
ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。ゆへあつた。

侍

末摘花

松風よ夏はくはりのあふせがあはれまゝにさる蓮生は若
 親主の姫君もれど小鼻なども赤く密義あふ
 わらふ姫君も命婦もすさるる源氏とみあも
 逢ふことと秋のあけはく見まふもあまらぬ見
 苦しれ人もは後いぬひあまぬ先は推さるるあり
 源氏明石より攻洛の後花あま里城といひあ道

こそ。友の死はあつにさしあつ。け人ももといひあ
 了。若屋鋪しはくあま蓮生れ君もつり。
 別あま賀露もて古風も。姫君なり。後と源
 氏乃中書いよて。六條院は東の院よけ姫君を
 嫁おど任せあり

朝顔

かうれは葉の死はあつあまの朝顔とみあむすさる
 ともあま源氏もあま親主乃の姫君なりと

一生源氏よけしむらぎおちり。風雅なうへん
文通おどろけんしむらぎ。奇れ下向い急ぎは
急なり。おちり思ひやう急ちり

雲井鷹

文海乃よんちかぐさんどおぼつりやも現年月
幼少しむ祖母れと糸まると成人しむらぎ
密通が出来しむらぎ。けりおれと親乃内府
大よ三腹し。我方へ引り。六七年も夕暮と隔

とよわらう文の肉しむらぎまにむらぎしむらぎ友
裏茶書り夕暮よゆらむらぎ。奇れを雲井
存乃ん那と

筑業監

引しむらぎしむらぎのむらぎむらぎしむらぎ
けりしむらぎ交代せぬ武士ちり。官の位ぐら
おどろしむらぎ男親類多しむらぎ九州急ぎの勢は
そのなり。父好しむらぎしむらぎしむらぎ女なるしむらぎ

はさきぞ記さしひせんとき男なり

玉鬘タマカヅラ

男オトを推おししたる人のちるせむしういふをさやん
夕ゆふ白びやく腹はらの頭あたま中ちゆう将しやうの子こなる。こは泉いづみの流ながはく
りて。ササむらうむらうあきあき系けいののりりきり。実じつれ父ちちは内
大臣ないだいじんみまうみまうとせど父ちち乃の方かたはてはらりれた
し。或ある右みぎ近ちかををいいひひままをを。源げん氏しよ吐はきせせ我われ娘むすめふ
せんといひも。六む条じょう院いんへへまませ。夕ゆふ白びやく乃の志しははに

子こ成なりももんんととららへへはは實じつ心しんをを推おししたる。後のちに
後のちに實じつの親おやももああれれ内うち侍しやくののかかららなり。後のちに源
室むろよよ成なりり。女むすめははむむししははななのの。後のちに源
氏しもも内うち府ふををいいひひままのの女むすめなり。ああははかららり
ねねらら志しははり

右近ウチノキン

二ふたががれれささだだうう一いつももふふををかかららああねねののちちににままううででげげららききば
ひひくく夕ゆふ白びやく乃の方かたははなり。夕ゆふ白びやく乃の志しははなり

たゞ女あり。その後を源氏方に居るなり。
もよの娘あまを玉づくにまゐりたれど。
おと和歌寺ふまゝで。宿屋にもまゐるなり。
まふなり。おのちをがえり

三條

悪く頼むも和歌寺の頼むはゆかぬと云ふ
和歌の歌言にまづこれ幸を祈る。大臣
は娘が紙交領の女方にまゐりて悪く

いさう。げ下女もむゝあつとまづよはふて。
筑紫へりゝ女なり

豊後

君ゆふつゝいさふも書子ねむるに渡り
大宰小貳の子に忠信あり。筑紫の監城あり
むら書子も推す。主人玉づくにまゐり。
子舟ふまゝ都をさへまゐり。奇い書
みか

源内侍

弱こよだもすまめぬらうはまのむおひらうを何なんもあ
ふ十をま老女をれどいつてあめとて源氏も
つなまおひ一執おひたり。後おひ女おひ又おひ又おひの方おひは居おひて源氏
を見おひまう程おひもゆりて女おひなり

警兵部卿官

ほのつゝもあはれ昔の志よどつゝいよひとらうとて源氏
源氏の中よまあり。風よ神よの丈よつてよ陰よ合よはるよあ合よ

おの判せんりあり。むづせんをせんはく思せんひぬ。源
氏せん堂せん成せん多くせんあをて。ません光せんるせんをせんほせんつせんにせんせせんり。
奇せんの堂せん官せん乃せん意せんあり

鬚黒

もいから人の多せんう。むづせんあせん髪せんをせんむせんとせんうせんらせんと
帝せん成せんもせん先せん多せんれ人せんのせん心せんをせんうせんけせんれせんとせんむせんづ
とせんをせん書せんよせんせせんれせんらせんびせんうせん。おせんいせん鬚せん黒せんのせん意せん

近江君

神佛に逢く候と云はばあんも存みちびたぬと乃たうり理れり。惟たも
それも思ふ處し

アキコノムチウダウ
秋好中宮

多おほうちのいよはらにおもいはしむら秋好あきよしをささりけり記き載ざい
桐壺帝の御せん前ぜん坊ぼう君きみのゆ子ことてあ女にむすむす母は
六條む息ぢ所ぢなり。十とはとてあ女にむすむす母はとりり
ともいは伊い勢せへりりり。後のち又また母はとりりりにあり
せり。母は又また秋あきをささりけり。あら秋あきをささりけりとりり

うら思おもはしむら秋好あきよしの名ななり。源氏げんじのは女にむすむす
みよとりりり。六條院むつじょう乃の秋好あきよし方かたいは中な宮みやの
由よし里りとりりり

ハナナハナ
花散里

花散里はななはなとりりり。源氏げんじのは女にむすむす
藤ふじ原はら殿の女にむすむす御ごのは妹いなり。源氏げんじ花散里はななはなとりりりの中なかにありて
四季しきにありて夏なつもありて住すみなりり。別わかれりりりられ
よし人ひととりりり夕ゆふ暮ぐりのは影かげをささりけり。同どうじに六條院むつじょうにありて

押さねふあなたらあそりしうん馬場か
 おもひもゆ。秋も萩萩すれ女房花かやわ
 ちりつれくさし。後さし。ゆんもなまこ野さうさ
 忠をもねさせ。よのつらとく糸月乃水にうら
 ちりれいしきさぬ海かなう。六条さうさか
 川のあさを引くあそり候うて。あそりつ
 ちりい山路さうさ。ゆんもなまこ野さうさ
 ちりい山路さうさ。ゆんもなまこ野さうさ
 ちりい山路さうさ。ゆんもなまこ野さうさ

かやう。冬いあお枝乃前裁雪のそけづねうど。は
 ちりねれりし世ねさるも居るがうらうて。ゆ
 まらちりもまはさし。ちりさの清殿の源氏
 ちり中ねさる。夏いれあ里秋とゆき女中
 宮のゆきと宮のちり。冬い明石とさうさ。ち
 付乃ちり縁うてまにんさるぬ指よ。福乃美の戸
 あそりれりし女房さるぬ乃さるしねさる
 一源氏今准をと天皇れ御位とて業花の盛

とらふ。命とつゝの限あれど。そのみ
らをはくさる。世に居る。けうねくも人もあ
んともおぼつれ。

真本柱

年城を別つ。志本のけらにもまゝおのちの
後運の先妻腹の娘なり。後運もつとを我おし
らへ。先妻の親里へゆき。娘の志本柱
とてはまゝにちか。後運は女をさしけ

家と志本柱のけらにもまゝおのちの
親王の娘なり。後運もつとを我おし
とてはまゝにちか。後運は女をさしけ

落葉宮

死ぬづうし。おのちの月夜にまをす。おのち
朱雀院の女二乃姫。おのちの志本柱。おのち
おのちの志本柱。おのちの志本柱。おのち
おのちの志本柱。おのちの志本柱。おのち

いしや女この婦ななり。さほど後にはもあらう
報なり。おはかるとも思ふ事

カシハギ
柏木

末路いさく業ん柏木れあぬいよ柏わらわ
内府の中書腹乃嫡子なり。諸君もつうて何事
おもあひいれ人なり。女この文のまはるる
なり。さほど。意に実をい人のきこなり。女この宮源
氏の中書よさうらぬ後女この婦文為禁を

いしや女この婦ななり。さほど後にはもあらう
報なり。おはかるとも思ふ事
いしや女この婦ななり。さほど後にはもあらう
報なり。おはかるとも思ふ事

ニヨサンニヤ
女この宮

いしや女この婦ななり。さほど後にはもあらう
報なり。おはかるとも思ふ事

朱雀院の第二の姫文なり。母君とてうらせ給
ひす。院乃御寵をよき養育し給ふ。十は又
まごに乃養育をゆく。もて養育し給ふ。十は又
姫宮なり。柏本へ客通をて後にたよ姫宮なり。入
道の文ももて。新にかうもて。

業上

久ふとて思ふがうらけ給ふ。そのよしを柏本へ
父ハ兵部卿主。母ハ按察使大納言の娘なり。け

娘よき給ふ。思ひあひて養育し給ふ。その母娘も
みもて。後の信朝の妹はこれなり。信朝の尼
うの養育もて。信朝とて。源氏入をて
あひて。思ひあひて。十は十なり。養育し給ふ。養育し給ふ
よ。いぬあり。養育し給ふ。あひて。後の源氏新本書あり
招き給ふ。女は源氏の方へ清興入の及
はんづ。いよて。たよあり。源氏新本書あり。源氏新本書あり
源氏新本書あり。源氏新本書あり。源氏新本書あり。源氏新本書あり。

薫乃海へ志すしむる姫君あり。されども一交も枕
かきさぐ程なく死しぬ。父君乃山は事の傍ら
のよ。あげ巻むまじかぐしめ。いづも昔は君も
しり。奇に薫れどめえ

ナカノキミ
中君 大君の妹あり

あるうつくしき山はふも父の志どるや引とえんむ
右二人も八宮の由子とて中書腹の女あり。
薫乃媒とて言治めて白宮よ逢えり。後に自宮

系へまゝいふしとていふはけきしめ。夕暮の娘
中書ふなき新中書治へ帰るるれしといひあり。
されど父乃山男子おけしに。毒城をいひん言
災の由方とていふは。いづれもいひぬ。いづれも
んを慰めあり。秋をいふもいふもいふも。父乃
小宮の宮君の由子あり

ニホフミヤ
白宮

いさばうらけしむ。姫君も場人馬に。いさばうらけしむ

治院に還留するはるれを。浮舟を拾ひて比叡
の山乃為坂本結尾を度へしきありあり。け度
えんある竹が中舟浮舟は付せけぞうする
とらうさざりて。僧都小戒をうけ度なる。淋く
心さあつおあまは。てあひ
ともしり。はる誰が子と振るとひてと。何
ごも覚るべとて。後。後。後。僧都大因一か
持よりき。何とせらむ。れあり。娘を拾ひる

と中宮へ。はる。成次の間。はる。是。是。人。居。れ。大
く。我。う。う。女。お。ん。と。あ。い。振。り。て。文。う。を。き
は。る。れ。ど。何。も。も。覚。る。べ。と。返。す。も。せ。ぬ。後。は。是
ら。う。う。小。野。へ。る。の。り。れ。ど。は。る。ま。ま。に。愛。の。振
は。る。も。も。覚。る。べ。と。是。人。が。も。も。情。け。人。な。れ。ど。
尾。よ。め。れ。ば。是。情。の。す。い。な。れ。き。當。乃。は。る。の。り。
せ。い。が。し。て。き。し。も。あ。ら。ん。と。ん

時方

カホル
薫

大のまにゐるがうばはこれ文の山をたづねては多分
宮乃小宮八宮の二人は姫君を逢なり浮舟もたふ
あつたまじきをこれ整うも。薫はそのまゝに
ほくくに浮舟も薫を羨乃浮橋をわづれやうれ
思ひあふ。道遠院及羨乃浮橋を城よりみたり
由奇なり。あつた誰をわづれも同じくをいひ
うむ羨れうれ。

○源氏物語の雲隠しとして書かれたるが。今一篇を此中
のゆきも同じをよみん。宇治十帖成り
そのとを。白無垢の紅梅川のよき。その後
隠しより其年記と計りて。宇治十帖のあつた
あつた。それや右にその。記も混雑し。知卷
まじの振りの。宇治の年記おもしろし。或曰宇治十
帖の大貳之位が筆もよき。又十帖も書式成る
べし。宇治も筆習かた。女もけ振り

あつたてんをさしてちかひが少くはんもつてさめ
あんなよ白お梅川乃と巻の娘の位は後
はせさせられぬ何や第一の筆習の指
まはなす。と位は筆とつて。けいさなとつて。やま
りし是の我あんなまじがあふはくごんおぼる
あよまをさつちり

人物評論

○世よを始と終とつていふはあつたてんは女

そのいさやうはれつよ有るものにはあつたてんは
武初はげの女房をさしてさしはれ人ちり
○玉響はあつたてんの源氏君我屋補一をさして親切
き育はつたてんはあつたてんはあつたてんは
つたてんは源氏と私とあつたてんはあつたてんは
つたてんの家にあつたてんはあつたてんはあつたてんは
あつたてんはあつたてんはあつたてんはあつたてんは
あつたてんはあつたてんはあつたてんはあつたてんは

○朝魚毎院はあつたてんはあつたてんはあつたてんは

居る^{あま}尾^おを^を延^のび^のり^り末^{すま}の^のす^すあ^あど^どい^いく^く恨^{うら}む^むま^まを^を。日^ひが
布^ふ籠^せり^りこ^こも^もい^いく^く衣^い敷^か城^{じやう}あ^あと^とゆ^ゆら^らい^いけ^け方^{かた}
ふ^ふと^とい^いく^くし^し那^など^ど体^{たい}み^みあ^あと^と法^{ほふ}恵^ゑ心^{しん}院^{いん}の^の僧^{そう}侶^{りよ}よ
子^こ能^のあ^あら^らう^うを^をさ^さら^らん^んや^やう^うれ^れる^るも^もな^なら^らず^ず。又^{また}藤^{ふじ}原^{はら}を^を
小^こ時^{とき}の^の天^{てん}養^{やう}濟^じ代^{だい}の^のり^り末^{すま}と^と成^{なり}思^しひ^ひく^く。時^{とき}の^の毒^{どく}に^に
む^むい^い天^{てん}子^しよ^よあ^あら^らう^うか^から^らぬ^ぬと^と濟^じ身^{しん}に^にあ^あら^らじ^じと^と
い^いは^はれ^れし^しと^と命^{いのち}を^をお^おし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^と
忠^{ちゆう}臣^{しん}乃^の付^つ死^しり^り名^なよ^よ誠^{まこと}と^とい^いふ^ふも^も知^しら^らず^ず。右^{みぎ}臣^{しん}ハ

名^なを^を思^しひ^ひ妻^{つま}子^こも^もあ^あら^らず^ず。増^まは^はし^しる^るも^も思^しひ^ひは^はら^らず^ず。
○光^{ひくわ}源^{げん}氏^しハ^ハい^い物^{もの}終^{はつ}の^の時^{とき}に^に死^しな^なれ^れを^を理^{ことわり}と^とい^いは^はれ^れし^しと^と
が^が。い^いは^はら^らず^ずと^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^と
娘^{むすめ}藤^{ふじ}原^{はら}と^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^と
か^から^らぬ^ぬ大^{だい}將^{しやう}ら^らう^うと^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^とい^いは^はれ^れし^しと^と
も^もも^も知^しら^らず^ず。け^け時^{とき}源^{げん}氏^し右^{みぎ}大^{だい}將^{しやう}なり

源氏物語大意上卷終

